

## 比較思想から見た仏教認識論

仏教認識論は、解脱のための真実智を探求する大乘仏教の思索のなから生まれた〈正しい認識手段〉(プラマーナ)をめぐる思想の総体である。「認識論」(epistemology)は本来、知識(エピステマー)の探究を目指す西洋哲学由来の言葉であるが、プラマーナ論の射程には、認識の起源や本質、そして、ある認識が真であることの条件をめぐる諸問題が収まることを考慮して、ここではプラマーナ論を「認識論」と表示する。

この思想を確立したディグナーガ(陳那)とその後継者であるダルマキールティ(法称)の理解によれば、私たちに正しい認識を与える源泉は、およそ概念的思考の一切を離れたところで成立する純粹な知覚か、二項間の必然的関係を前提とする推論のいずれかでなければならない。この二つの〈正しい認識手段〉の定義や分類、そしてその適用の仕方を考察することにより、仏教認識論は、長い歴史を通して多彩な議論を醸成してき

た。

その一部が東アジア世界にまで伝えられた仏教認識論という知的遺産は、現代の研究者の地道な文献実証的な研究により、徐々に一般にも認知されてきている。だが、サンスクリット語やチベット語の知識なしで翻訳書を手にしたとしても、その正確な理解は困難を極めるだろう。そのため、これまで比較思想の領域では、ナーガールジュナ(龍樹)の『中論』やヴァスバンドウ(世親)の『唯識二十論』などが比較対象とされることはあっても、ディグナーガやダルマキールティの著作が比較の組上にあがることは稀であった。

しかし近年、特に英語圏で活躍する研究者により仏教認識論を現代の分析哲学や現象学、あるいは認知科学との対話を進める動きが登場し、状況は大きく変化しつつある。T・ティレマンズ、G・ドレイファス、M・シデリッツ、J・ダン、D・ア

護山真也

ーノルド、C・コセルなどの研究者は、西洋哲学の概念や術語を用いてデイクナーガやダルマキールティの思想を解説し、分析哲学や現象学をプロパーとする研究者との学際的なシンポジウムやワークショップの形で様々な共同研究を展開している。

ここで読者のなかには、今から千年以上前の、しかも非西洋の思想の一つである仏教認識論をわざわざ現代の哲学に対応させて論じることには何の意味があるのか、と疑問をもたれる方もあるだろう。確かに、仏教学は古典学の一つであり、写本に基づく原典批評と歴史的・文化的な文脈のなかに当該の資料を位置付ける厳密な文献学の手法で研究が進められることは事実である。文献学的な土台のないところで思想を語ることはできないというのが、これまでの常識であったし、その基本線は今後も蔑ろにされるべきではない。しかしながら、そのことは、仏教学が古典学の牙城に閉じこもったままでよいことを含意するわけではあるまい。同じく哲学の古典とされるプラトンやアリストテレス、あるいはカントやヘーゲルという哲学者たちの著作は、形而上学や認識論、美学から倫理学まで多様なテーマを扱う現代の分析哲学の潮流のなかで、刺激的なアイデアを与え続ける参照軸として常に読み返され、解釈され直されている。ならば、デイクナーガやダルマキールティの著作もまた、同じように現代の哲学者たちにアイデアを与える参照軸として読み直されてもおかしくないのではないか。仏教学の研究者の使命は、自分たちが取り扱うテキストを単なる古典として提示する

ことにあるのではなく、その古典が潜在的にもつ哲学的意義を他領域の研究者に受け取りやすい形で提示することにあるのではないか。現在、英語圏の研究者たちを突き動かしている動機の一つには、このような思いがある。G・ドレイファスは次のように述べる。

(西洋のなかで) アジアの思想を学ぶ者の使命のひとつは、その古典がより広い思想史のなかに統合されるようにすることにあると思う。その際、非西洋の思想を提示するときには、他の諸文化の概念と関連し得る術語を用いる必要がある。(……) だが、このような(西洋中心的な) パースペクティブから書かれる哲学史のなかにインド思想を統合することには、ある種の危険性がある。(西洋の視点から見た)〈客観的な〉概念を導入するということは、結果として、復元されるべき原典に対して修復不可能なダメージを与えることになりかねないからである。(G. Dreyfus,

*Recognizing Reality*, SUNY Press, 1997, p. 111c)

ドレイファスは、西洋哲学の術語で仏教思想を語ることは、西洋哲学に馴染みのある読者の理解を助けるという利点がある反面、二つの伝統のあいだにある差異が消されることで、仏教思想の固有性が見えにくくなることの危険性を十分に理解している。だが、そのリスクを背負っても、仏教思想を開かれた思想史の文脈のなかに位置づけることが優先されなければならぬと考える。このような考え方の背景には、伝統的な西洋哲学

が説く真理の普遍性を批判し、多様な文化や価値への配慮を促す、リチャード・ローティに代表されるネオ・プラグマティズムの運動が想定されるだろう。彼らは、彼ら自身の文化に馴染みの概念を用いて、他文化を理解することの暴力性に自覚的でありながら、そこで継続される対話を通して、自文化のなかに他者の眼差しを取り入れることに少なからぬ意義を見いだしている。

文化間対話を指向する大きな潮流は、北米における哲学教育の現場も席卷しつつある。仏教学者のJ・ガーフィールドが中国哲学の研究者B・ファン・ノーデンとともに二〇一六年五月十六日付けの『ニューヨークタイムズ』に寄稿した「もし哲学が多様化を望まないのなら、それを本当の名前で呼ぶことにしよう」(If Philosophy Won't Diversify, Let's Call It What It Really Is)という論説では、多様な文化的背景をもつ学生が集まる米国の諸大学で欧米哲学中心のカリキュラムが生まれ、中国哲学やインド哲学、イスラーム哲学など世界の諸思想が教えられていない状況に警鐘が鳴らされている。哲学教育の現場が変われば、研究の方向性もおのずと変わっていく。その過渡期に当たるとが期待されている。

では、具体的にはどのような点に留意しながら、仏教認識論を比較思想の議論のなかに位置づければよいだろうか。以下では、現時点で筆者が重要と考える三つの視点を提言したい。

第一の視点は、翻訳に関わる。およそ仏教認識論に限らず、非西洋の思想を比較思想の土俵にのせるためには、ある程度まで西洋哲学の術語に頼らざるを得ないことをまずは認めなければならぬ。仏教に固有の文脈を重視するあまり、漢訳をそのまま訳語として採用したり、サンスクリット語やチベット語をそのまま音訳するようでは、異文化間対話はおぼつかない。しかしながら、西洋哲学の術語を無批判に使用してしまうと思われぬ誤解を招きかねないことにも注意が必要である。とりわけ仏教認識論と西洋の経験論とは類似した問題意識を共有しているだけに、後者の問題が生じやすい。逆に、その点に注意を怠らなければ、翻訳の場面でこそ、比較思想的なアプローチの効果が期待できる。

一例として、〈ジュニャーナ〉(jñāna)と云うサンスクリット語の翻訳を取り上げる。この語は一般には「認識」(cognition)とも「知識」(knowledge)とも訳される。一見すると、両者には違いがないように思われるかもしれない。だが、西洋の認識論に理解があれば、後者には「正当化された真なる信念」(justified true belief)という古典的定義が与えられており、この定義をめぐって様々な議論が展開されてきたことが想起される。また、「知識」は、蓄積され、必要に応じて呼び起こされるものという含意があるが、それが〈ジュニャーナ〉に当てはまるかも疑問である。仏教認識論における〈ジュニャーナ〉は、瞬間的に生じては滅するエピソード的なものであり、また、そ

れ自体は真でも偽でもない。そう考えると、この訳語としては「認識」の方が妥当するだろう。

このようにして仏教認識論の一つ一つの術語を精査してゆくことが比較思想の実践であり、他の諸思想との対話のための不可欠の作業である。

第二の視点は、比較の方法論に関わる。時代や地域を異にする二つの伝統を比較するためには、まずは両者に共通する要素やモデルを見極め、その後細部の相違点を一つ一つ検討する手法が有効であろう。

ダルマキールティの分析によれば、私たちの意識は瞬間的に生滅を繰り返している。日常的な場面では、それぞれの意識は外界対象からの刺激を受けて、その対象の〈形象〉(rūpa)を意識内部に形成することで、その対象をそれとして把握するという構造を有する。言うまでもなく、この議論はただちにロツクに代表される経験論の枠組みを彷彿とさせる。両者に共通するのは、私たちは外界の事物そのものを直接に知ることはできず、それらはあくまでも意識内部に形成される感覚与件を通して間接的に知られるにすぎないとする立場である。

さらに言えば、西洋哲学の文脈では、感覚与件の存在は錯覚論法と呼ばれる議論から導かれるが、同様の考えはダルマキールティも表明している。よく知られた錯覚論法では、水に差した棒が屈折して見える事例を通して、私たちの直接的な知覚対

象は、外界にある物理的な対象とは異なる心的対象、すなわち感覚与件であることが結論づけられる。ダルマキールティはティミラ眼病(飛蚊症)を患う人間を例として、その人物が外界の灯火を眺めるときに極彩色の円環の〈形象〉が見えるという事例を分析して、知覚対象となる〈形象〉の存在の証明を試みている。議論の細部は異なれども、いずれも実在と現象の二重性に鋭い分析の目を向けている。

したがって、経験論の議論を参照軸として現代の知覚の問題を論じるのであれば、仏教認識論の議論も一つの参照軸とすることは十分に可能である。ただし、両者の議論には見逃すことのできない幾つかの相違点もまた存在する。ここでは二点だけ簡略に記しておく。

一つは、二十世紀前半に活躍した論理実証主義者の議論によれば、感覚与件は不可謬のものとして、私たちの経験的知識の基礎として捉えられていたが、仏教認識論の場合にも同様の基礎づけ主義的な発想があるかどうかは議論の余地があるという点である。次節で確認する通り、仏教認識論の議論は瑜伽行派による瞑想の実践を背景とする。その実践のプロセスでは、〈形象〉は不可謬というよりもむしろ、私たちの迷いを生み出す原因として否定された。確かに、文脈によつては、〈形象〉が経験的知識の基礎と捉えられてもいるが、異なる文脈では、それは解体されるべきものと考えられている。このような〈形象〉の両義的性格は、感覚与件には見いだされない。私たちは、そ

の相違が生まれる背景に目を凝らしながら、各々の思想の輪郭を明瞭にしていかねばならない。

もう一つは、〈形象〉には〈自己認識〉(svasamivedana)と呼ばれる知覚の働きが介在しているという点である。デイグナーがダルマキールティは、一瞬間に生じる意識のなかに、その意識を自ら反省的に捉える自己認識の作用を想定し、あらゆる意識には必然的にその志向的対象と同時に、いわば経験の主体となるものを保証する契機(把握主体の現れ)があると考える。デカルトのコギトやカントの超越論的統覚などを比較の対象として想定しながら慎重に議論されるべき問題であるが、管見の限りでは、このような〈自己認識〉と一致する考え方は西洋の議論には見られない。その意味では、〈自己認識〉の理論は現代の知覚の哲学の諸問題に新たな知見を与える可能性がある。

第三の視点は、比較思想の意義に関わる。それは、仏教認識論に固有の議論を適切に評価することで、従来の知覚の哲学を相対化する眼差しを提供することである。

仏教認識論に固有の要素として、それが救済論(soteriology)あるいは解脱論と不可分であるという点は重要であろう。前節で見た通り、ダルマキールティは知覚の分析を行う際に、外界対象を前提とする日常的な場面を想定しながら議論を進める一方で、究極的には、瑜伽行派の伝統に立ち返り、外界対象を否定し、またその表象である〈形象〉も否定し、純然たる輝きと

しての心の在り方のみを認める立場に立脚した。現代の研究者により〈スライドする分析尺度〉(sliding scale of analysis)と呼ばれる思考法を通して、外界实在論から瑜伽行派の空の立場まで、自在にその立場を変えながら、ダルマキールティは、読み手を真実の世界へと導く。

もう少し詳細にそのプロセスを記述すると次のようになる。まず日常的なレベルでは、私たちは外界対象の刺激を通して意識に映じる〈形象〉をあたかも外界対象であるかのように思いなしている。この思いなしの働きをダルマキールティは〈実体視〉(adhyavaśya)と呼ぶ。私たちの日常的な世界は、あたかも外界対象であるかのように自分たちが実体視している対象で構成される。これが迷いの状態である。〈実体視〉は概念的な作用であるから、私たちにとっての世界は、概念的に構想されたものにすぎず、その外部は(私たちには)存在しない。また、この〈実体視〉は習慣化されることで、ますます堅固になり、それがあたかも所与の世界であるかのような錯覚を私たちに植えつける。一方、迷いの状態から悟りの状態を目指して宗教的実践を行うと、この意識が次第に変容していく。それは例えば、諸行無常を瞑想することにより、〈無常性〉という普遍的なものがある。それがそれまでの知覚世界に上書きされていく過程として描かれる。

このような宗教的要素は、西洋における知覚の哲学には馴染まないように見えるかもしれない。だが、より広く知覚の変容

や多様性を視野におさめるならば、二つの思想間には緊密なつながりがある。例えば、私たちの周りには知覚に関わる様々な病気や障害を抱えた人たちがいるが、彼らの知覚経験と比べて、健常者の知覚の方が真正なものとして特権化される根拠はどこにあるのかを考えてみたらどうだろう。西洋の知覚論で議論される上記の問題は、宗教的直感と日常的な知覚との差異と連続を問題にする仏教の議論と同型の問題意識を共有しているのではないだろうか。また、現代の知覚の哲学では知覚における身体性が注目されているが、瞑想に基づくヨーガ行者の直感を論じる仏教の議論を参照することで、呼吸や感覚器官の制御など知覚を成立させる身体的要素の考察から、知覚の変容を可能にする条件を探求することもできるだろう。このように、仏教認識論を参照軸とすることは、従来の知覚の哲学で論じられた問題をさらに別の視点から捉え直す契機となるにちがいない。

以上、仏教認識論を比較思想の文脈で捉え直し、現代の認識論や知覚の哲学に接続するための三つの視点を提示した。冒頭にも記した通り、現在、英語圏の仏教認識論の研究は比較思想的アプローチから豊かな成果を積み重ねている。彼らの研究をそのまま模倣することが最善であるとは思わないものの、それは狭い専門の垣根を越えることで見えてくる世界があることを教えてくれている。私たちもまた、本邦で培われた文献実証的な研究スタイルの利点を十分に活かしながら、仏教認識論の

研究をより広い領域に開いていくべき時を迎えているのではないだろうか。

\* 追記 本稿と密接に関連するものとして以下の拙論および論文集が公判された。

護山真也「仏教哲学の可能性——無我説をめぐる西洋哲学との対話」『現代思想二〇一八年臨時増刊号・仏教を考える』、二〇一八、一三八—一五一頁。

Jay L. Garfield (ed.), *Wuñid Sallars and Buddhist Philosophy: Freedom from Foundations*, Routledge, 2019.

(もりやま・しんや、仏教認識論、信州大学准教授)